



16歳の母

やぶき ひろこ
【矢吹 浩子・広島県】

彼女は妊娠8カ月。お昼前の産婦人科外来の白っぽい日射しの中で、髪は金色、上下ピンクのジャージ姿だった。大丈夫かなと誰もが思ったことだろう。指導に対してまともな返答は返って来ない。でも無事に女の子を出産。皆、胸をなで下ろした。

子育ては生活だ。眠ること、食べること、育児すること、全てのことを伝えたいと思ったが、説明だけでは足りないとも感じていた。あなたのことが大切なのと丁寧になんて伝えなかった。

そんなある日、沐浴を終えて赤ちゃんを彼女の元に連れて行った時、声を掛けられた。

「いいね」「ん、何が」「助産師なんじゃろ」「そうよ」「そうゆうの。看護師とか助産師とか」「そうかな」「うん、そうゆうの、私もやりたかった」

思わず涙が出そうになった。そんなふうに見ていてくれたのかとうれしくて、でもそんなストレートな気持ちを実現する前に、一人の子の母になったこと。子どもを授かることは貴いことだ、でも彼女は、本来、高校1年生だ。

「今からでもなれるよ」と説明したものの、彼女は1年後、第二子出産のため入院した。どうか何ごともなく、迷いながらも子育てを順調にしていってほしいと思っていたが、少女は少なからず母になっていた。そして若い夫婦になっていた。

第二子は男の子、新生児聴力検査で「要精査」となった。大学病院の受診を説明した後、照明を落とした暗い廊下で、若い父親はその子を抱いて、「絶対治してやる」と言った。また泣きそうになった。複雑な背景はあるけれど、丁寧な言葉のやりとりが心を動かしてゆく。若い夫婦がうらやましかった。